

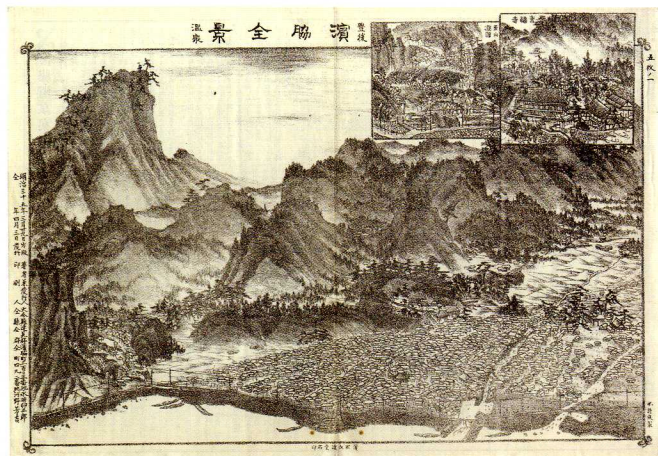
豊後国各温泉図 ぶんごのくにわかくおんせんず

明治35年(1902)に浜脇町(現別府市)在住の永井卯三郎・河野芳吉らによって出版された豊後の温泉図で、①「はまわき浜脇全景」、②「べつぷ別府全景」、③「みなみだていし南立石両温泉(観海寺全景・堀田全景)」、④「かんぱわ朝日村両温泉(鉄輪全景・明礬全景)」、⑤「かめがわ亀川及濱田全景」の全5図からなっています。

温泉場で賑わった浜脇町や別府町(ともに現別府市)などの景観が細部にわたって描写されており、各温泉図の裏には温泉案内として町の風景・交通・戸口・旅館などの記事も載せられています。それらによると、浜脇町は当時戸数1000余戸・人口4000人・旅館60余戸、別府町は戸数約1400戸・人口6700人・旅館150余戸とあり、別府町にある2、3の大旅館では外国人の宿泊にも便利な西洋料理の設備も備えていると紹介されています。

「浜脇全景」では、海岸沿いに明治33年(1900)に大分堀川一別府浜脇の間を走った路面電車も描かれており、また図中央部を流れる朝見川の右側には、大正6年(1917)に暗渠にされて道路となり、「流川通り」の由来となった川も描かれています。

本資料は、明治35年当時の別府八湯の様子とともに、同地域の豊後の景観を知りえる貴重な資料といえます。



浜脇全景

利用案内

- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日 但し祝日の場合は開館  
但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日  
祝日の翌日 但し土・日曜の場合は開館  
年末年始 12月28日～1月4日
- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円)  
中学生以下 無料 ※団体は20名以上  
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。  
◎入館時に受付で手帳を提示してください。
- 交通機関 ・JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分  
・大分バス[国分新町ゆき] 歴史資料館入口下車 徒歩5分  
・大分自動車道 大分I.C・光吉I.Cよりともに約15分

発行日：平成25年7月13日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL 097-549-0880 FAX 097-549-5766

※大分市ホームページの「観光・魅力」歴史・文化財「歴史・文化を学ぶ」大分市歴史資料館」も併せてご覧ください。  
(http://www.city.oita.oita.jp/)

ふれあい歴史体験講座

- 時間 各回70名程度(先着順)
- 定員 午前の部 9時30分～(約2時間)  
午後の部 14時00分～(約2時間)



	実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
第6回	8月3日(土)	土面作り	午前のみ	120円	7月19日(金)
第7回	8月17日(土)	粘土はにわ作り	午前・午後	220円	8月5日(月)
第8回	8月31日(土)	土偶作り	午前・午後	170円	8月20日(火)
第9回	9月14日(土)	かご編み	午前・午後	400円	9月5日(木)
第10回	9月21日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	9月5日(木)
第11回	10月12日(土)	管玉・丸玉作り	午前・午後	260円	9月20日(金)
第12回	12月7日(土)	土の鈴作り	午前のみ	50円	11月20日(水)
第13回	12月21日(土)	和凧作り	午前・午後	200円	12月5日(木)

■応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。  
(大分市歴史資料館：097-549-0880)

勾玉作り教室

■内容 夏休み中の2日間と11月の2日間に、歴史資料館1番人気の勾玉が予約なしで作れます。時間内であれば何回でも作れます。

実施日	受付時間
第1回 7月20日(土)	9時～11時と13時～15時
第2回 7月21日(日)	※時間内に随時受付けます。
第3回 11月23日(土)	(制作時間:1時間30分程度)
第4回 11月24日(日)	

■準備物 ■材料費 200円  
マスク・ビニール袋(着色用2枚)  
ぞうきんまたは古タオル・ビニール袋(粉入れ用1枚)

テーマ展示解説講座

- 内容 講座室でテーマ展示Ⅱ「江戸の愛好家」について、スライドなどで解説した後、展示会場を案内します。
- 日時 8月18日(日) 14時～15時30分
- 参加費 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

★上記の各講座等の参加者は観覧料が無料になります。

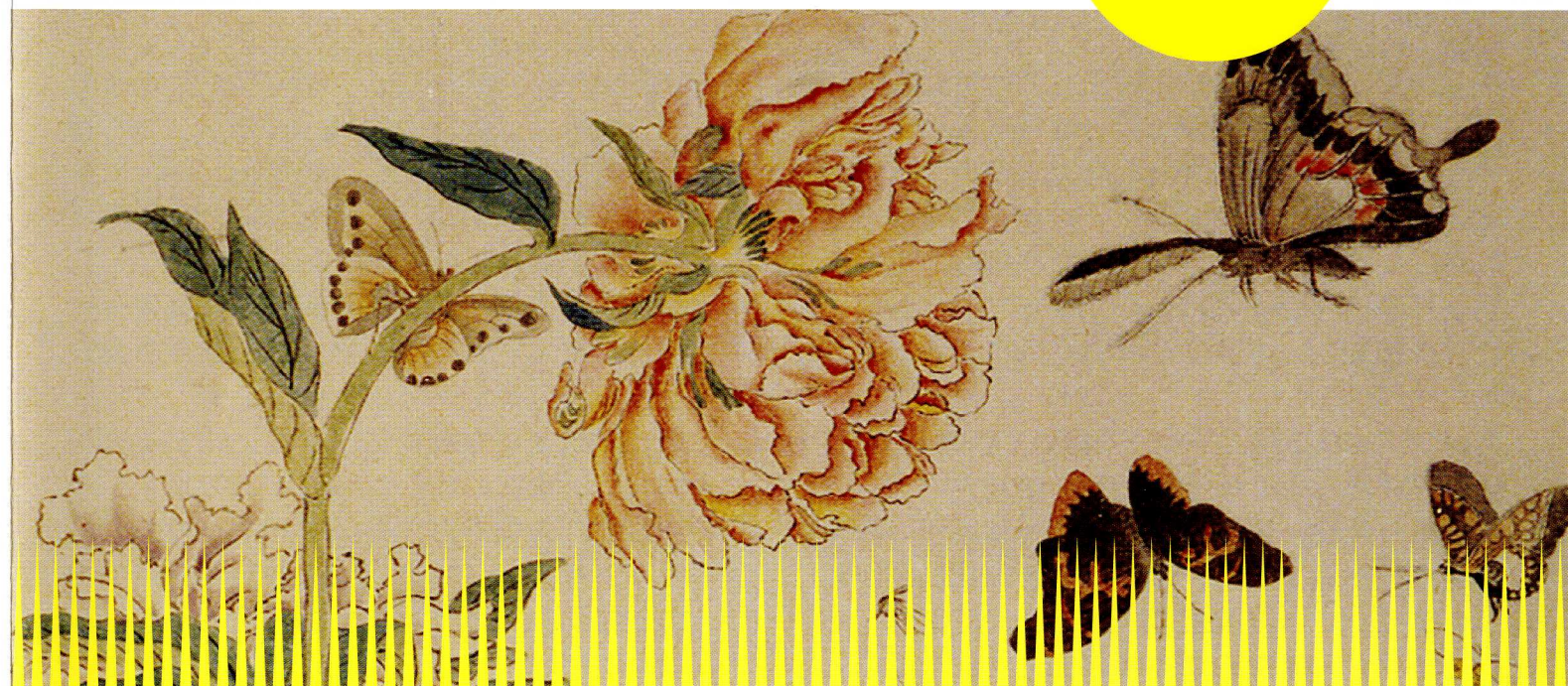


# 大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

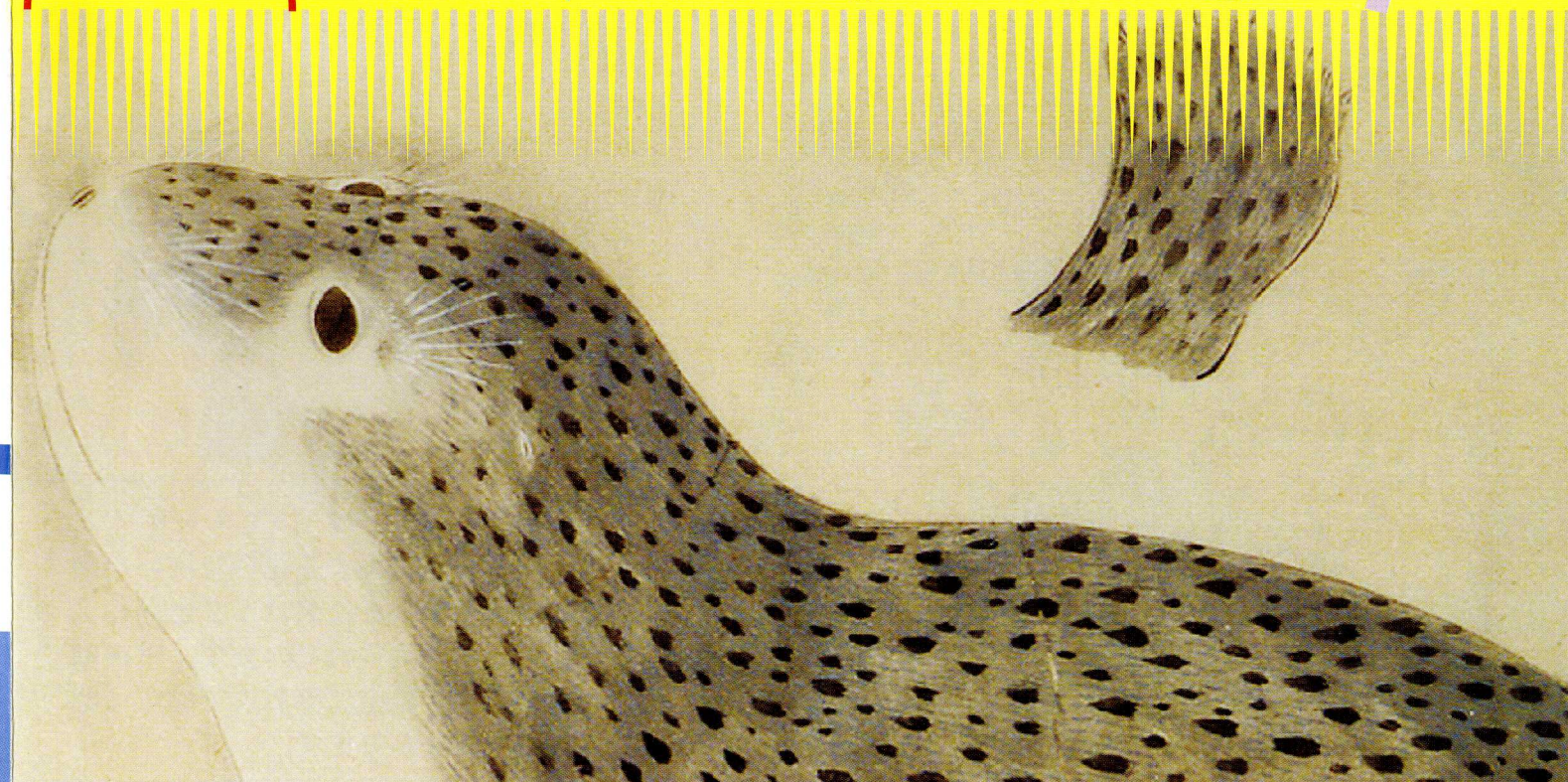
## ニュース

vol. 104  
2013.7.13



## 江戸の愛好家

2013年7月13日(土)→10月6日(日)



# 江戸の愛好家

江戸時代の250年は、世界史上類例を見ない平和な時代でした。この間、農・工業の技術をはじめ、学問や文化などの分野において、これまで以上の進展が見られました。そうした技術や学問等の進展の背景には、この時代に生きた愛好家ともいべき先人たちの旺盛な好奇心や探求心がありました。本展示では江戸時代の各分野の発展に寄与した愛好家たちの功績やこだわりを紹介しします。

**か 文化13年(1816)に現在の豊後高田市で生まれた賀来飛霞は、5歳で日出藩の帆足万里の門下に入り、13歳まで医学を学びました。この間に絵の手ほどきを杵築藩の画人十市石谷から受け、18歳になると京都にて本草学者の山本亡羊に師事し、本草学の研究を行うようになります。**

天保11年(1840)、由布岳で初めて採葉(山野に入り葉草を採集すること)を行ったのを皮切りに、大分はもとより北陸、東北地方など様々な場所へ積極的に採葉に出かけました。なかでも延岡藩に招かれて行った採葉は、「高千穂採葉記」として記され、その記録は植物学のみならず当時の庶民生活の記録としても貴重な資料とされています。

江戸時代の本草学者は、現地(おもむ)に赴いて実際に調査をするフィールドワーカーでした。飛霞もまた自ら各地に赴き、自分の目で見たものを詳細に描いています。

飛霞の描く図は、卓越した精緻な写生技術もさることながら、対象の周辺にある自然の様子や、断面図、拡大図を描くことで、対象を一面的に捉えようとするのではなく、あらゆる要素を見抜こうとする彼のこだわりが表現されています。

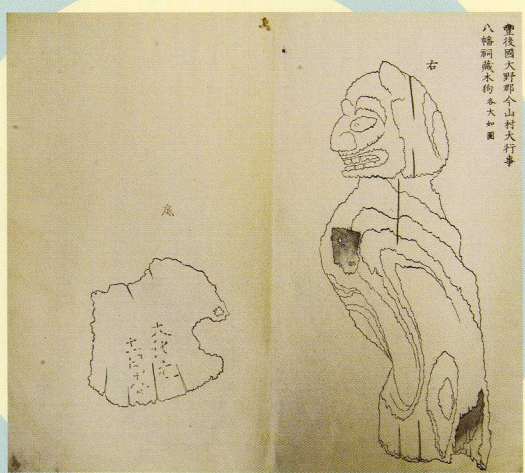


植物写生図(マテバシイ図)

**ごとうせきでん 幕末の動乱期のなか、旧乙津村(現大分市)の豪商後藤家に生まれた碩田は、その恵まれた環境を活かし学問の世界に入っていました。**

学問の関心は、日本史に関わる古文書や考古遺物、さらに軍学・生物学など様々な分野にわたっています。

碩田の代表的な著作に、豊後に関する資料を図にし、まとめた『大化帖』があります。その中には、古物や古文書など40点が収められており、そのはじめに「大化」の元号をもつ狗犬像が描かれ、本の名称はこれによったものと言われています。天保15年(1844)に著されたものの刊行には及ばず、その後、明治44年(1911)日名子太郎氏らによって出版され、以後碩田の考古学における偉業が広く知られることになりました。



『大化帖(試摺)』  
豊後国大野郡今山村大行事  
八幡祠蔵木狗犬

**表紙紹介** (上:花虫図、下:アザラシ図)  
花虫図は、牡丹とそれに集まる昆虫を描いた図です。アザラシ図は、精細さに欠けることから、剥製を模写したものと考えられています。飛霞は植物だけでなく、動物や昆虫に至るまで幅広く関心を持っていたことが分かります。

**おおくらながつね 明和5年(1768)、隈町(日田市)の農家に生まれた永常は、少年期に飢饉により、農民が苦しむ姿を目のあたりにしたことで「豊かな農村の実現」を目指しました。故郷を離れ、93歳で没するまで、日本各地の農業技術を学び、多くの農書を残しました。**

永常の集大成である『広益国産考』では、平易な語句の使用、ふりがな、作物や農具の挿図、進んだ農業技術の絵図の挿入等、多くの農民に読んでもらうためのこだわりが随所にみられます。

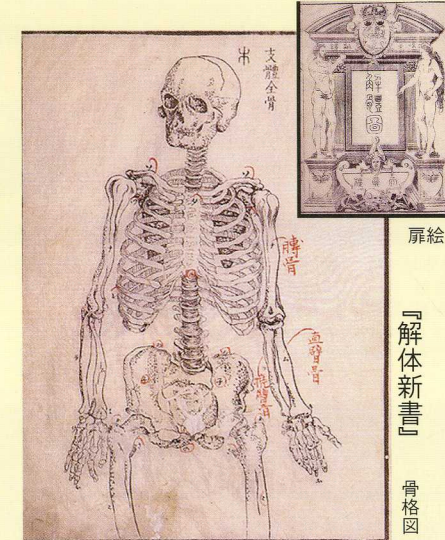


『広益国産考』第三巻

**すぎたげんぱく 享保18年(1733)、二代杉田玄白 続く医者の家系に生まれた玄白は、自身も医者・蘭学者として活躍したかたわら、日本初の西洋解剖書である『解体新書』を前野良沢や中川淳庵らとともに翻訳したことで有名です。『解体新書』の翻訳は、原書となった『ターヘル・アナトミア』の立体的で正確な解剖図に感動したことにより始まりました。**

当時の西洋書は銅版画のため、ひじょうに細密な線を表現することができました。しかし、日本には木版画の技術しかなく、解剖図を忠実に写すために玄白が採用したのが、洋風画(蘭画)の技法でした。そこで白羽の矢がたったのが、平賀源内のもとで洋風画を学んでいた小田野直武でした。

銅版画と見紛うばかりの解剖図に玄白のこだわりを感じます。



『解体新書』  
骨格図

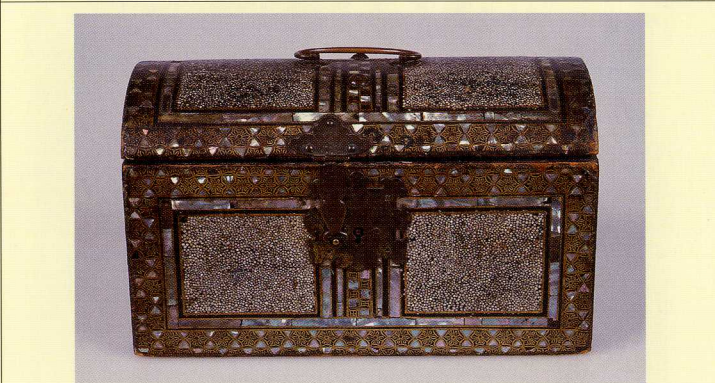
# 江戸時代 こだわりの一品!



**ちやっかしきねつけ 着火式根付**  
根付は印籠や小物入れなどを腰からぶら下げる際に用いた留め具で、江戸時代中期以降、実用性と共に装飾性を兼ねたものが流行しました。

本品は、現代のライター機能を備えたものです。根付を着火道具にすることで、いつでもキセルでタバコを吸えるようにした愛煙家たちのこだわりがうかがえます。

**ぶどうずつば 葡萄図罽**  
江戸時代中期に流行した南蛮趣味の影響を受けて制作された罽で、葡萄が象られています。聖書には、葡萄の木がイエス・キリスト、枝が信徒として例えられており、信仰の恩恵が実であると記されています。



さめがわはりらでん まきえようぶつ  
鮫皮貼螺鈿蒔絵洋櫃

16世紀後半から17世紀前半にかけて日本で作られた輸出用の漆器で、鮫皮貼・螺鈿・蒔絵の技術が用いられています。螺鈿は光沢のある貝殻を色々な厚さに切って木地などに貼っていく手法で、安土桃山時代から江戸時代にかけて人気を博しました。本品は、優れた日本の漆器技術の結晶で、煌びやかな装飾に制作者のこだわりがうかがえます。